

清代の中体西用論と西学中源説について

末 岡 宏

序論

長い歴史に裏付けられた伝統文化を持った中国が近代になって西洋の文明を受け入れねばならなくなった際には、様々な対応が生まれた。中体西用論も西洋の科学技術を受け入れる際に用いられた枠組みの一つである。中体西用論とは、魏源『海国図志』の「夷の長技を以て我が師とする」に萌芽が見られ、馮桂芬『校邠廬抗議』にある「中国の倫常名教を根本として、(西洋) 諸国の富強の術を助けとしたならば、善の善なるものではなかろうか」とあるのがその初期のものである。つまり、中国の伝統的な政治・制度・道徳・学問などの精神文化的なものを根幹としていけば、末節である応用技術に西洋の科学技術を使うことができると、中体＝礼教、西用＝技術として、中国の学術を本質的な部分としながら本質的でない部分については西洋の学術を一部受け入れるというものである。従来、この中体西用論は、中体の範囲が人文社会的分野へ後退していき、西用の範囲が軍事技術から科学技術全般に更に政治制度（いわゆる変法論）と拡大すると説明されてきた。筆者は以前嚴復の中体西用論批判について考察し、その批判は中国の伝統文化を否定する嚴復が中体西用論の中国伝統文化を肯定して点を否定しているからではなく、中体と西用つまり異なる文化を無理矢理結びつけようとする点を問題にしていることを明らかにした。¹そして、従来我々日本人は中体西用論を理解する際に和魂洋才と同種の構造を持ったものとして捉えすぎていることによって、嚴復が伝統文化を全面的に否定しているかのような誤解が生じているのではないかという仮説を考えた。既に研究者たちによって指摘されているとおり、中体西用論と和魂洋才（論）の違いは、中体が名教体制という確立した実体を持つものに対して和魂は抽象的なものであるという点にある。また和魂洋才には、欧米文化の全面的導入（全般欧化）の中で日本人としての主体性を維持しようとする志向が根幹にある。それに対して中体西用論は西学を取り入れたために、中国の伝統を損なうものではないことを示すことを目的とする。このような違いがあるために、実際の論理には大きな違いが生じており、知らず知らずのうちに西洋の学術の導入を主張する者を全面欧化論の文脈で理解しようとしていたのではないか、また中体西用論を「遅れた」ものとして捉えてしまうのではないかということである。

このように中体西用論の捉え方を再検討するにあたって、本稿では西学中源説に焦点をあててみようと思う。西学中源説は、中源説とも呼ばれ、西洋の学術の起源が古代中国にあるとす

るものであり、西洋の学術を中国に導入するために使われる論理ということで、従来は広義の中体西用論に含めて捉えられてきた。実際前述した中体西用論の西用の範囲が拡大する過程の中で、拡大された西用の学術の分野について、常にその学術が中国に起源を持つことが求められており、中体西用論と緊密な関係があることは確かである。しかし、和魂洋才の論理の中には西学中源説的な要素は見られない。この違いを検討することによって、中体西用論の特質を明らかにすることができるのではないかと考えられるのである。

前稿で、嚴復の中体西用論批判を検討した際には、筆者自身中体西用論と西学中源説の区別を明確に意識していなかった。しかし、今回嚴復の批判を検討してみると、直接に批判しているのは西学中源説であることがわかった。だとすれば、西学中源説批判として、清初の西学中源説にまで遡って検討する必要がある。本稿では、まず清初の西学中源説を検討した後、近代の西学中源説を検討し、最後に嚴復の西学中源説批判を検討した上で、西学中源説の持つ思想上の意義について考察することとする。そして、中国がアヘン戦争以降西洋の学術・文化を受容するにあたって、どのように受容してきたかを中体西用論特に西洋の学術は中国に起源があるとする西学中源説に注目して、西学中源説の生まれた過程及びその原因について考察し、西学中源説はアヘン戦争以降のいわゆる「ウエスタン・インパクト（西洋の衝撃）」によって新たに生み出されたものではなく、少なくとも明末清初の宣教師による暦学・数学の受容の時点から存在していた論理の焼き直しであること。そして従来からあった伝統思想の枠組みの中に存在していた異文化を受容する論理の部分と呼応していることを明らかにしていきたい。

一 清初の西学中源説

西洋の自然科学を中国起源だとする西学中源説は近代に始まったのではなく明末清初の西学の受容の際にも見られる。マテオ・リッチ（利瑪竇）アダム・シャルル（湯若望）ら明末清初のイエズス会宣教師たちによって伝えられた暦学を中心とする西洋の学問（西学）の流入は、時憲暦（崇禎暦）を支える暦学として取り入れられた。暦学は経学の体系の一要素であって、伝統的学術に取り入れられた。暦学は暦の策定という国家の大事を支えるものであって伝統学術の中でも重要な位置を占めている。それと同時に、季節の変化、日食・月食などの天体の運行など現実によってその正確さが検証されるという科学の要素を持っている。更に天文計算の基礎となる数学も伝統学術の中に位置づけられている。中国では既に元朝時代から西洋の暦が用いられてきた。

梅文鼎（1633～1721）は安徽省宣城の人。中算・西学に通じた上、古算法を解明し、康熙帝の信頼も篤かつ人物であり、代表作『曆算全書』のほか、『明史』曆志も梅文鼎の手によるとされる。梅文鼎は『歴学疑問補』の中で西学中源説を説いている。「論中土歴法得伝入西国

之故」で次のように西洋の暦法が中国から伝わったことを説明している。

問う、ヨーロッパは数万里も離れたところにあるのに、古の暦法がどうしてそこに伝わったのだろうか。『史記』（暦書）は、「(周の)幽王厲王の時代に、疇人の子弟がちりぢりになってしまい、あるものは中国に残り、あるものは夷狄の地に住んだ」とある。思うに乱を避けるために、遠くに行くのもいとわず、書物や機器を携えて移り住んだものがいたのだろう。それならば遠くの国で暦術のことを言えるものは、西域にいるには理由がある。『堯典』に「羲和に命じて、欽しんで昊天に従い、日月星辰の運行の記録観測し、敬んで人に時を教えた。」とあり、これは天子の天文官が都にいるものであり、その本家なのであろう。またその分家に命じて、四方に住ませ、春分秋分夏至冬至の日の影を観測させ、里差の法を調べさせたのだろう。「羲和を嵎夷に住ませて暘谷と言った」というのは今の山東半島なのであろう。「羲叔を南交に住ませた」というのは、ベトナムなのであろう。この東と南の二カ所は大海に面しているのに、それより先に行けなかった。「和叔を朔方に住ませ幽都といった」というのは今のモンゴルである。土地は極めて寒く、冬至にはここで最も短い影を観測したが、これより北には行けなかったのであろう。「和仲を西に住ませて昧谷と言った」とあるのは、西と言うだけで土地を限定していないのは、大海に阻まれることなく西に移動でき、気候もほぼ内地と同じで北の厳しい気候に阻まれることもなかったのだ。この時には、堯舜の教えは四方に及び、和仲は帝命を奉じて観測するので、西に行くことができれば更に西に行く。遠方の人は徳を慕って影のように従い、その一言の教えられたこと、一事の伝えられたことがあるなら、まともし発見の道を開くならば、かの優れた人は、これを論議して、変化を完成させるということがあったはずだ。歴史を考察してみると唐の開元中に九執暦があり、元の世祖の時ジャマル・ウッディンが観測して西域万年暦があり、明の洪武帝の時初めてイスラム暦を訳したのは、皆な西国の人であって、東や南や北の諸国では聞いたことがないことで、その概要がわかるであろう。²

上記のように、『史記』暦書と『尚書』堯典の記述に基づいて、堯の時の天文官羲和の子孫たちのうち、観測のため西方に住んだ天文官が、戦禍による混乱を避けるため更に西に移動して、中国の暦法を西洋に伝えたと説明している。『歴学疑問補』で梅文鼎は、中国の天文学が西洋に流伝し西洋で発展したことを主張するのであるが、その目的は西洋の暦法を中国に取り入れることにある。そもそも暦学は天文観測によって得られた事実と符合するかどうかでその正しいか否かを判定できるものであって、本来西学中源説によって説明する必要はない。『歴学疑問補』は比較的晩い時期の著作であり、梅文鼎は西洋の暦学の正しさは、それが中国に淵源を持つからではないことはわかっていたはずである。それを梅文鼎が敢えて行っているのは、西

学中源説による説明が不可欠のものであったからなのである。

次に阮元の『疇人伝』を見てみよう。阮元（1764-1849）は、江蘇省儀徴県の人。『十三經注疏校勘記』『皇清經解（学海堂經解）』『經籍纂詁』の編纂が知られるが、湖広・両広・雲貴総督を経て体仁閣大学士にまでと官僚としても出世している。『疇人伝』は阮元の時代までの暦学数学者の伝記を集めたもので、中国最初の数学史と言える。その『疇人伝』で阮元は西学中源説を述べている。『疇人伝』の「凡例」には

西法とは実は中国から盗み取ったものであることは、前人が既に詳しく論じている。地球球体説は曾子に基づくし、九重天の説は、楚辭に見える。凡そ彼らのいわゆる至精極妙というものは、皆な借根方は東萊法であり、ただ算書を翻訳する時事実を記さなっただけである。最近の算学に巧みな学者は、今の人を秘密を守り古人に罪を着せ、西術の精密であることをほめ中法を軽んじているのは、なんと不思議なことであろうか。³

と述べ、『續疇人傳』の序で

私が思うに張衡に地動儀があり、その機器は伝わっていないが、旧説では地震を観測するものであると推測しているのは、間違いである。私はひそかにこれは地球が動き天が動かない（という太陽中心説の）モデルであると思う。そうだとすれば蔣友仁の地動説は、これに基づいたのかもしれないし、偶然に一致したのかもしれない、そのどちらかはわからない。⁴

このように阮元もまた、西学中源説を述べるのであり、先に述べた清初の天文学者・数学者梅文鼎の著作もまた、西洋の天文学・数学が中国起源であること、つまり西学中源説を述べている。つまり、このように明末清初における西学の流入の際に生じた論理が、中体西用論・西学中源説に引き継がれているのである。もちろん、当時はアヘン戦争後とは異なり近代西洋諸国の政治的・軍事的な危機の中でどうしても西洋の学術を取り入れねばならないという状況にはなかった。従って西洋の科学技術を早急に強制的に取り入れる必要があったわけではない。しかし明末清初の西学者もまた、西学を経学の体系に組み込むに当たって、西学中源説的な検証作業が必要であったということも示しているのである。

二 近代の西学中源説

序論で触れたように近代に至って中体西用論を初めて指摘したとされる馮桂芬は『周髀算經』

や『周礼』など中国の古代の書籍の中に西学と同じ要素を見いだせることを述べてはいるが⁵、それが中国に伝わったことには述べていない。少なくとも後に述べる王韜・鄭観応らが説くような中国の学問が西洋に流伝したとする主張はないにしても、古代の中国の学術つまり中国の伝統学術の中に西学の要素を見い出そうとしているのは確かである。このことによって、西学を採用することの正当性を主張している、つまり西学中源説と近い主張をしているのだと考えられる。また、中体西用論を説く薛福成（1838-1894）の『籌洋芻議』には「算学は中華に始まって西洋の地で精細を極めた」（変法）というように西学中源説を述べはするが。ここでは、西洋の科学技術を逐一中国の学術に照らし合わせようとするのではない。馮桂芬・薛福成ともに明確に西学中源説を説いているわけではないが、西学が古代の中国に存在したことを説いており、中体西用論には西学中源説ないし西学中源説的主張が必ず付随することがわかるであろう。

次に王韜の西学中源説について分析してみよう。王韜（1828-1897）は江蘇省呉県の人。上海で宣教師たちと交わった後香港に渡って翻訳の仕事に携わった。その『弢園文録外篇』は1883年刊である。王韜はその「原学」で

中国は、天下の宗主国であり、文字を作った始祖であるだけではない、礼学の制度や、天文・数学の技術は、中国から他の国に流伝したのだ。中国は堯の世に当たって、羲和と昆仲は測天の計器を制作し、琬璣玉衡を用いて七政を治めた。兄弟四人が分かれて東西南の朔を置き、西だけを昧谷と言った。おもうに西の果ては限りがなかったからだろう。当時疇人の子弟は、その学問をか土地の人に授けなかったらうか、故に今の借根方（代数）は、東來法と称する。そこで欧州人が東來とするのは、これはインドを指して、震旦（中国）と言うのではないのである。インドは正に震旦から得ているのを知らないのである。欧州人の律曆・物理の大半はインドから来た、インドは正に震旦から授けられた。もし楽器について言うならば、七音の巡り互いに代わるのは、宮であって、欧州人が創る風琴（オルガン）は、その管の長さや度合いは、正に中国の古楽器と異ならない。他に行軍の音楽、金管楽器は、中国にもともとあったもので今失っているだけだ。周の世になると、魯の伶官は遠征しようとし、少師陽襄は海に遠征しようとした、どうして古の器械、古の音がこのことによって西に向かわなかったらうか。他に祖沖之が千里の舟を造り、風や水によらず、機械仕掛けで動いた。楊玄の輪船は、水輪が水を打ち、飛ぶように進んだ。これは欧州の蒸気船戦艦の始まりではないだろうか。指南車の法は姫元公が越裳氏を送って帰った時からあるし、大砲は宋の虞允文の采石の戦いに見えていて、フランゴ砲に先んじている。電気は琥珀法から出ており、時計は明の揚州人が自分で製造していた。この他に測天儀はどうして琬璣玉衡を起源としないものがあるらうか。⁶

ここで王韜は、中国に科学技術の起源があったことを述べているが、科学技術を分野に分けて説明するというやり方はとっていない。また、全体として伝達経路について詳細であるといえよう。王韜が中国から西洋に伝わったという項目を挙げてみると次のようになる。

天学 制器測天 羲和・昆仲
数学 借根方（東来法）
声学 楽器 七音之循環迭変・・・
機器 戦艦 祖冲之能造千里船・楊慶之輪舟 汽車
機器 指南車 姪元公
機器 法朗机炮 霹靂炮 宋虞允文采石之戦 金人
電学 電気 琥珀法
機器 時辰鐘 明揚州人

これは後で触れる鄭観応・巖復の体系だった分類に比べると、科学というより西洋の技術を思いつくままに挙げただけの観がある。ここでわかるのは、王韜は、具体的な事物の伝来に関心があり中国の文物が西洋に流伝する過程を詳細に説明していることである。

ここまで、中体西用論を主張する馮桂芬、薛福成、王韜の西学中源説を検討してみたが、いずれもその説明が詳細か粗略か、伝来の経路に触れるかどうかの違いはあるとしても、なんらかの形で西洋の学術の起源が中国にあることを説明しようとしていることがわかる。また王韜になると西学中源説でとりあげる西洋の学術・事物はかなり詳細となっている。

次に、鄭観応の『盛世危言』から西学中源説を述べている箇所をとりあげ分析してみよう。鄭観応（1842-1921）は広東省香山県の人。上海に出て英華学院でフライヤーに英語を学び、李鴻章に認められ、上海機器織布局を始めとする官営企業の経営に携わった買弁型企業人とされる。『盛世危言』は議院制を始めとする政治制度改革を主張する初期変法思想に位置づけられる。『盛世危言』は1892年と日清戦争直前に刊行されているが、その原型となる『易言』は1875年に刊行されておりその主張はほとんど『盛世危言』に引き継がれている。

『盛世危言』の中で鄭観応は西学中源説を「道器」「西学」の二篇で述べている。まず『道器』であるが、これは盛世危言の最初の篇であり、道器つまり道＝中体を守って器＝西用を用いることで万全となると中体西用論を主張している部分である。ここで鄭観応は、「『大学』の格致一篇が亡び、『周礼』の冬官一冊が欠けてから、古人の名物、象数の学は、流れて西洋に入った、その（科学）技術の精髓は、はるかに中国が及ばないこととなった。」と述べて、「大学・格致章」「周礼・冬官」という古人の名物・象数の学つまり器に相当する科学技術も中国から西洋に伝わって発達し中国では失われてしまったものだ」と説明する。「大学・格致章」「周礼・冬官」は

一般的には秦漢の際つまり焚書によって失われたとされている。また西学を中国に取り入れることによって体と用が備わると西学を取り入れる必要性を説いている。次に「西学」であるが西洋の学術を学ぶ必要性を説いている部分がある。ここでまず次のように述べる。

西洋の学問について論じると、整然としていて、商業政策、兵法、造船、機械製造から農業、漁業、牧畜、鋤業に至るまで、まことに一つも精密でないものはなく、しかもすべての根源は気学、光学、化学、電気学から導き出しており、水、火、風、電を制御する要領をつかんでおり、だから混沌に穴を穿って、造化の働きをわがものに行うことができる。⁷

ここで鄭観応は「泰西之学」の分野を「商政」「兵法」「造船」「制器」「農」「漁」「牧」「鋤」としている。その根源にあるものを「汽学」「光学」「化学」「電学」とする。次に西学の起源が中学と一致する点を見てみよう。

昔大撓はこよみを定め、神農は鋤や鋤を作り、史皇は文字を創り出し、軒轅は衣冠を制作し、蚩尤は兵器を作り、湯は飛車を作り、揮は弓を作り、夷牟は矢を作った。その創造の始めは、人を驚かせるような、神のような技をたてたのである。まして、星気の占いは輿区に始まり、勾股の学は隸首に始まり、地図の学は髀蓋（周髀算経）に始まり、九章の術は周礼に始まり、地円の説は管子に創られた。それだけではなく、渾天の制は璣衡に倣っているのであれば、測量にも（これに）来源がある。公輸子は木の人形を削りだして御者とし、墨翟は木の鳶を刻んで飛ばし、武侯は木牛流馬を作ったのであれば、機器はこれから来ている。秋官の象胥の官を鄭玄は訳官と注していれば、翻訳はこれから来ている。陽燧で火を日光からとり、方諸で水を月からとっているから、格物（物理学）はこれから来ている。（一つは）化学であり、古書に載せる錬金・腐水・離木で、同は重、体、合、類、異は二、体、不合、不類があるという、これが化学が私たちから出たものである。（一つは）重学であり、古にいう均質であれば髪に平均に物を懸けることができるが、物に軽重があれば髪が絶たれるのは均しくないからであるというのは、均質であれば絶とうとしても絶てないとあり、これが重学が私たちから出たものである。一つは光学であり、古にいう鏡に向かって立つと影が（倒）立するというもので、二つの光が一つの光点を挟めば、足は下光をさえぎってその影は上にでき、頭は上の光をさえぎるから、それで下に影ができ、中（焦点）に近いと映る部分は大きく影もまた大きくなり、中に遠いと映る部分は小さく影も小さくなるという、これが光学が私たちから出たものである。一つは気学であり、亢倉子に地を蛻するを水といい、水を蛻するを気というところ、これが気学が私たちから出たものである。一つは電学であり、關尹子に石を撃つと光を生じ、雷電が気によって生ず

るのも、またこれを作ることもできる。淮南子では陰陽の気が近づくと雷となり、激しく上がると雷となるといい、これが電学が私たちから出たものである。⁸

これをそれぞれの項目に分けると

天文学 星気之占 輿区
数学 勾股之学 隸首⁹
地学 地図之学 髀蓋（周髀算経）
数学 九章之術 周礼
地学 地円之説 管子
図学 測量 渾天之制昉於瓊衡
機器 公輸子，墨翟，武侯
工学 格物 陽燧取明火於日，方諸取明水於月
化学 燐金腐水，離木同重，体合類異，二体不合不類
重学 均髪均懸 輕重而髪絶，其不均也均，其絶也莫絶
光学 臨鑑立影，二光夾一光，足被下光，故成影於上，・・・・・・
気学 亢倉子：蛻地之謂水，蛻水之謂気
電学 閔尹子，淮南子，琥珀拾芥

この鄭観応の西学のジャンルについて、当時の西学の分野について一般的な認識を示していると思われる梁啓超『西学書目表』の巻上「西学諸書」の分類と比べてみよう。梁啓超は「算学」「重学」「電学」「化学」「声学」「光学」「汽学」「天学」「地学」「全体学」「動植物学」「医学」「図学」の13の分野を挙げていて、鄭観応の分類とほぼ一致していることがわかる。¹⁰ 一致しないのは「格致」「機器」に分類されているもので、「機器」は巻中「西政諸書」に「工政」として収められる「工学」の諸書が該当するのであろう。梁啓超の分類は、工学を応用科学と考えていたので「西政諸書」という大分類にしたのであろうと考えられるが、現在でいう自然科学に属するのは間違いなかろう。つまり当時の西学のジャンルのおもだったところを挙げて、その起源が中国にあるとしているのである。鄭観応の西学中源説は、王韜とともに先に考察した馮桂芬・薛福成らに比べてより内容が増えているが、それは19世紀後半に入って洋務運動に伴って西洋の科学技術が急激に流入したことを示しているのであろう。

三 嚴復の批判

最後に「救亡決論」の批判を通して嚴復が考える西学中源説について確認しよう。「救亡決論」は、初期四部作の中では最も遅く、1895（光緒二十）年5月1日から8日の間天津の『直報』に掲載されたものである。その内容は、大きく1. 科挙に八股文を用いること（の弊害）への批判、2. 西学を用いることへの反論に対する批判、3. 附会論に対する批判、の三つの部分に分かれている。本稿ではこの中の第三の部分に注目する。嚴復は次のように批判している。

最近、更に自ら一流であるとして、西洋の科学について、僅かに耳で聞いたことを知って、実際のことは検討しないものがある。その心の中は、自分を持ち上げ他人をおとしめ、博識を誇り、古書の中に似たものを捜して話し、西学はすべて中国に既にあったもので、いささかも新奇なものはないと考える。¹¹

この「古書の中に似たものを捜して話し、西学はすべて中国に既にあったもので、いささかも新奇なものはないと考える」とは、西学中源説を指していると考えられる。次に

中国の秦の焚書の一事は、古来の冤罪の源である。およそ事の明らかでないのは、ある者は今の学問が古に失われたとし、古を尊ぶ者は秦の焚書で失われたと解する。古の聖賢の地の及ばないこと、言行の過ちがあれば、また必ず努めて挽回し、代わりに大目に見ようとする。

阮元は地円の説は絶対に変えることができないことを知って、「旁詭四潰」の一語を取り、曾子が以前に知っていたことだとする。また地動説は公理として疑えないとわかると、なんと「靈憲」の地動儀と断定し、張衡が既に天が動かないことを明らかにしていたとする。これらは皆うまく傳會していても、（そのこじつけが）天下の目を全く隠せなものだ。孔子となると、生まれながら将来がわかる聖人であるとし、すべてを知っていたとする。これはでたらめなこじつけで古人をたばかって自らの欺瞞を強めるものであり、大いに学問の障害となっている。¹²

ここで、嚴復は阮元の疇人伝に見られる西学中源説を二つ挙げて批判している。この「西学の起源を中国に求め、古にはなかった西学を中国の古代には発見されていたが焚書によって失われたことによるものとする」ことは、でたらめなこじつけで古人をたばかって自らの欺瞞を強めるものであり大いに学問の障害となっていると批判しているのである。ここで嚴復は、地球球体説・地動説という西洋の科学の成果を中国に起源を持つという西学中源説に無理がある

ことを批判しているのであって、中国の学術と西洋の科学技術を結びつけることつまり中体西用論を批判しているのではない。もちろん、嚴復は別の箇所では中国には中国の体用があり、西洋には西洋の体用がある、と中体西用論そのものを否定しているのであるが、ここでは西学中源説に限定して批判している。このことは、嚴復にとって西学中源説によって中体西用論の正しさを証明するというような完全に一体のものではなく、ある程度別のものであると捉えていることがわかる。またここで、嚴復は先にとりあげた阮元の「疇人伝」に見られる西学中源説を「これらは皆傳會であって、天下の目を覆い隠せない（全く隠せない）ことが及ぶものはないものだ。」と「傳會」という語で強く否定しているのである。

更に詳細に西学中源説を批判しているのは次の部分である。

星気は輿區に始まり、勾股は隸首に始まり、渾天儀は璣衡に倣っており、機械は班墨（墨家）に創られ、方諸・陽燧は物理学の祖先であり、鍊金腐水（鍊金術）は化学の生まれたもとであり、重学（力学）は均髪均懸が始まりであり、光学は臨鏡成影（鏡に影を映すこと）が始まりであり、水や空気を変化させる気学は亢倉に始まり、石を打ち合わせると光る電気学は關尹に基づいている、というようなものである。（このような）大げさな言葉は、いちいち述べることができないほどだ。この指しているものが間違っていることは、しばらく深く論じない。ただもしその説が本当に正しければ木の細工を挙げて龍驤に驕り、竹細工で（天子の乗り物である）大輅を譏るもので、またどうして人が目を見張るに足らうか、いわゆるはずかしめの甚だしいものだ。¹³

この部分を王韜・鄭觀応と同様にそれぞれの科学技術の項目に分けると次のようになる。

天文学 星気 輿區
数学 勾股 隸首
地学 渾天 璣衡
(機械工学) 機器 班墨（墨家）
(物理学) 格物 方諸・陽燧
化学 化学 鍊金腐水（鍊金術）
重学（力学） 重学 「均髪均懸」
工学 光学 「臨鏡成影」
気学 気学 「蛻水蛻気」 亢倉
電学 電学 「擊石生光」 關尹

これを、先に挙げた鄭観応「西学」と比べると、「九章之術」「地円之説」を除いて、項目が一致することがわかる。特に、隸首を勾股（ピタゴラスの定理）の始めとしているのは、その出典と考えられる『史記』『曆書』を鄭観応は誤って引用しているが、嚴復も同じく隸首を勾股と結びつけていることから考えて、嚴復は鄭観応の所説を参照しているのは明らかである。つまり「救亡決論」で直接の批判の対象としたのは、鄭観応の『盛世危言』であると考えて間違いはないだろう。だとすれば、嚴復のいう焚書のせいにして、古代発見されたものが失われたというのは、「道器」篇の『『大学』の格致一篇が亡び、『周礼』の冬官一冊が欠けてから、古人の名物、象数の学は、流れて西洋に入った、その（科学）技術の精髓は、はるかに中国が及ばないこととなった。』¹⁴ という記述を指していると考えられる。「救亡決論」のこの部分で嚴復は鄭観応を名指して批判しているわけである。

また嚴復が西学中源説を否定していたことは、上記のような自然科学の分野に限らない。梁啓超「嚴幼陵に与える書」で触れられる嚴復の『古議院考』への批判は、嚴復からの手紙は見られないために、その詳細な内容は不明であるが、『古議院考』に述べられる、中国にも昔から「議院」（議会）があったとする説を批判するものであったと考えられる。更に嚴復は、これらの事例の不正確さを批判するだけでなく、このような事例で西学と中学の一致を説く西学中源説の学問観や論理自体をより一層厳しく否定しているのである。

結論

さて、ここまで考察してきたことをまとめると次のようになる。まず前稿で指摘したように、中体西用論自体は、「中学の知の体系は人類共通の普遍的な知の体系に等しい。従って中学＝普遍的な知の体系とは異なる西学の知の体系は、常にそれ対して検証を必要とするが、中学の知の体系に位置づけられる個別の事象は検証の必要はない。」と中国の知の体系の普遍性を前提としているものである。その限りにおいて、中体西用論の中で西学はその正しさを証明しなければならず、西学中源説はその証明の一種であることがわかる。西学中源説をとらないものは、別の形で西学の正しさを証明（あるいは暗黙裏の承認）をしているはずである。例えば、二度にわたるアヘン戦争や太平天国の乱制圧に際して軍事技術における欧米諸国の圧倒的な優越は、戦いの結果そのものが証明しているといえよう。しかし、ことが軍事技術の基礎になる科学技術、また科学技術を生み出した西洋の社会・文化となると、何のこともわりもなく西学が優れていると証明することは難しい。例えば当時の天体観からすると、地球球体説や地球の自転といったことでさえ、なんらかの説明抜きでは説明しがたいことではなかったかと思われる。その西学中源説は、清末の西洋の学術の移入に際して初めて出てきたものではない。清初の西学との接触、つまり西洋の暦学や数学の導入に際しても梅文鼎や阮元によって述べられたもの

なのである。

ではなぜ嚴復は西学中源説を否定したのかを考えてみよう。そのためには、まず西学中源説はなぜ必要とされたかを考えてみる必要がある。従来、王韜・鄭観応を含む中体西用論及び西学中源説は、西洋の軍事技術・科学技術を「奇技淫巧」であるとする批判に対して、西洋の優位を軍事技術ひいては科学技術及びその背景にある学術・文化を学ぶ必要から説かれた、一種の便法であると捉えられて来た。もちろんこの理解は間違っていないのだが、それだけでは近代中国が西洋の学術・文化を受け入れる際に必ず西学中源説を用いることを説明しきれないのではないか。その背景にある学術観を考える必要があるだろう。そもそも中体西用論は、西洋の学術・文化は中国と同じ体系であるという前提に立っている。中体西用論はそれを踏まえて、アヘン戦争後の西洋の学術の受容について、伝統文化の体系の一部を西学で補完することが可能だとするものである。つまり、中体西用論でも例として出されるように、明末の西学の受容の体験と同様（中国）伝統文化の大きな総体の中で、西学はその不十分な部分を補完するものとして捉えられているのである。ただし、中体西用論それ自体は西洋文化が伝統文化の体系（中の一部分）を修正することができる可能性を認めているに過ぎず、該当する西洋の学術が正しいことは証明していない。そこで補完の妥当性を証明するためには、なんらかの伝統学術における手続きが必要となる。中学で西学を証する、つまり古典との照合という経学的方法、それが西学中源説であるということだろう。科学・技術であればその正しさを証明するのは西学中源説によらずとも比較的容易に論証できであろうと今の我々には感じられるが、必ず中国の古典（中学）による証明、西学中源説が必要だとされていたのである。そして天文・暦法から自然科学の諸分野へ、更には社会科学にと、範囲を拡大するたびごとに、該当する分野の起源を中国に探し求めてきたのである。

これを、前稿で述べた、中学の知の体系、西学の知の体系、人類共通の普遍的な知の体系という三つの知の体系で整理してみよう。中学西源説においては、中学の知の体系は人類共通の普遍的な知の体系に等しい。従って中学＝普遍的な知の体系とは異なる西学の知の体系は、常にそれに対して検証を必要とするが、中学の知の体系に位置づけられる個別の事象は検証の必要はない。嚴復においては、西学の知の体系と中学の知の体系は互いに独立した二つの体系であり、人類共通の普遍的な知の体系の中に包摂されている。従って、中学も西学も各々が人類共通の普遍的な知の体系に対して検証を必要とする。ここで中学の知の体系は世界全体を包摂する普遍性を持つ知の体系であることを放棄している。このように考えてみれば、三者の関係には、別の組み合わせが可能なのことがわかるだろう。つまり、西学の体系こそが人類共通の普遍的な知の体系であって、中学の知の体系は西学の体系＝人類共通の普遍的な知の体系に対して検証を必要とするというものである。これは、全面欧化論などがこの立場に立つ。

嚴復のように中学の体系と西学の体系を区別する限りにおいて、中学で西学を証明する西学

中源説は誤っていることになる。従って、実際に西洋の学術・文化の正しさを中国の古典で証明することは行っていないと考えることができる。つまりここで敵復は、中国の伝統学術をひとくりに否定しているのではなく、中体西用論的な発想自体が誤っていることを主張して、西学は人類の学術という広い意味での妥当性は中学と共通の基盤を有するが、あくまでも中学とは別個の体系として考えるべきものであって、その二つを安易に接合してはならないと考えているのである。

付記 なお本稿は平成18年度学術研究費補助金による研究（基盤研究（C）「近代中国における国学の研究」課題番号：15520037）に関する研究成果の一部である。

注

- 1 「敵復の中体西用論批判」富山大学人文学部紀要 第46号
- 2 「問歐羅巴在數萬里外，古歷法何以得流通至彼，曰，太史公言，幽厲之時，疇人子弟分散，或在諸夏，或在夷狄。蓋避亂逃谷，不憚遠涉殊方，固有挾其書器而長征者矣。然遠國之能言歷術者。多在西域則有故堯典言乃命羲和，欽若昊天，歷象日月星辰，敬授人時。此天子日官在都城者。蓋其伯也。又命其仲叔，分宅四方，以測二分二至之日景，即測里差之法也。羲和宅嵎夷曰暘谷。即今登萊海隅之地，羲叔宅南交，則交趾國也。此東南二處皆濱大海。故以爲限又和叔宅朔方曰幽都。今口外朔方地也。地極冷，冬至於此測日短之景，不可更北，故即以爲限獨和仲之宅西曰昧谷，但言西而不限以地者，其地既無大海之阻，又自東而西，氣候略同，內地無極北嚴凝之畏，當是時，唐虞之聲教四訖，和仲既奉帝命測驗，可以西則更西。遠人慕德景從，或有得其一言之指授，一事之留傳，亦即有以開其知覺之路，而彼中穎出之人，從而擬議之，以成其變化，固宜有之，考史志唐開元中，有九執歷，元世祖時有札馬魯丁測器，有西域萬年歷，明洪武初有馬沙亦黑馬哈麻譯回回歷，皆西國人也。而東南北諸國無聞焉。可以想見其涯略矣。」（『歷學疑問補』卷一「論中土歷法得傳入西國之故」）
- 3 「西法實竊取於中國，前人論之已詳。地圓之說，本乎曾子，九重之論，見於楚辭。凡彼所謂至精極妙者，皆如借根方之本，爲東萊法，特譎詭算書時不肖質言之耳。近來工算之士，每拋今人之密，而追咎古人，見西術之精，而薄視中法，不亦異乎。是編罔羅今古，善善從長，融會中西，歸于一是。凡夫改一率立一法者，輒因管見所及，於篇末著論，以發其趣，其是非互見謬妄不經者，亦皆竊寓褒貶，評其得失，天學淵微，析衷匪易，所願與海內學人共審定之者也。」（『疇人傳』「疇人傳凡例」）
- 4 「元且思張平子有地動儀，其器不佞旧說以爲能知地震，非也。元竊以爲此地動天不動之儀也。然則蔣友仁之謂地動，或本於此，或爲暗合，未可知也。」（『續疇人傳』續疇人傳序）
- 5 馮桂芬『校邠廬抗議』採西學議
- 6 「中國，天下之宗邦也，不獨爲文字之始祖，即禮樂制度，天算器芸，無不由中國而流傳及外。當堯之世，羲和昆仲已能制器測天，用璇璣玉衡以齊七政。而兄弟四人分置於東西南朔，獨於西曰昧谷者，蓋在極西之地而無所紀限也。當時疇人子弟，豈無授其學於彼土之人者，故今借根方猶稱爲東萊法。乃歐洲人必東來者，是指印度而非言震旦也，不知印度正從震旦得來。歐人之律歷，格致，大半得自印度，而印度則正授自中原。即以樂器言之，七音之循環迭變，還相爲宮，而歐人所制風琴，其管短長合度，正與中國古樂器無殊。他如行軍之樂，鑊吹之歌，中國尚固有之，至今失傳耳。當周之衰，魯國伶官俱懷高蹈，而少師陽襄則遠人於海，安知古器古音不自此而西乎。他若祖冲之能造千里船，不因風水，旋機自運。楊么之輪舟，鼓輪激水，其行如飛。此非歐洲火輪戰艦之濫觴乎。指南車法則創自姬元公以送越裳氏之歸，霹靂炮則已

見於宋虞允文采石之戰，固在乎法朗機之先。電氣則由試琥珀法而出者也，時辰鐘則明揚州人所自行制造者也。此外，測天儀器，何一非由璇璣玉衡而來哉。」（『攷園文錄外篇』原学）

- 7 「論泰西之学，派別条分，商政，兵法，造船，制器，以及農，漁，牧，礦諸務，實無一不精，而皆導其源於汽学，光学，化学，電学。以操御水，御火，御風，御電之權衡，故能鑿混沌之竅，而奪造化之功。…」（『盛世危言』西学）
- 8 「昔大撓定甲子，神農造耒耜，史皇創文字，軒轅制衣冠，蚩尤作五兵，湯作飛車，揮作弓，夷牟作矢，當其創造之始，亦何嘗不驚人耳目，各樹神奇。況夫星氣之占始於史區，勾股之學始於隸首，地圖之學始於髡蓋，九章之術始於周禮。地圖之說創自管子。不僅此也，渾天之制昉於璣衡，則測量有自來矣。公輸子削木人為御，墨翟刻木鳶而飛，武侯作木牛流馬，則機器有自來矣。（祖衝之之千里船，不因風水施機自運，楊麼之樓船，雙輪激水，行駛如飛，則輪船有自來矣。）秋官象胥，鄭注譯官，則翻譯有自來矣。陽燧取明火於日，方諸取明水於月，則格物有自來矣。一則化學，古所載燻金腐水，離木同重，體合類異，二體不合不類。此化學之出於我也。一則重學，古所謂均髮，均懸輕重而髮絕，其不均也均，其絕也莫絕。此重學之出於我也。一則光学，古云，臨鑑立影，二光夾一光，足被下光，故成影於上，首被上光，故成影於下，近中所鑑大影亦大，遠中所鑑小影亦小。此光学之出於我也。一則氣學，亢倉子，蛻地之謂水，蛻水之謂氣。此氣學之出於我也。一則電學，關尹子，石擊石生光，雷電緣氣以生，亦可為之。淮南子，陰陽相薄為雷，激揚為電。磁石引針，琥珀拾芥。此電學之出於我也。」（『盛世危言』西学）
- 9 『史記』曆書の索隱では「史區占星氣，大撓作甲子，隸首作算數」と隸首は算數の創始者とされており、鄭觀応になんらかの誤解があると思われる。
- 10 梁啓超『西学書目表』1986年上海時務報館刊。増田渉「梁啓超と『西学書目表』」（『中国文学研究—「文学革命」と前夜の人々—」（岩波書店1967年）にも収録。なお「全体学」とは身体に関する学問のこと。
- 11 「晚近更有一種自居名流，於西洋格致諸學，僅得諸耳剽之餘，於其實際，從未討論。意欲揚己抑人，誇張博雅，則於古書中獵取近似陳言，謂西學皆中土所已有，羌無新奇。」（救亡決論『嚴復集』）
- 12 「中國秦火一事，乃千古談遇淵叢。凡事不分明，或今世學問為古所無，尊古者必以秦火為解，或古聖賢智所不逮，言行過差，亦必力為幹旋，代為出脫。如阮文達知地圓之說必不可易，則取「旁陀四隕」一語，謂曾子已所前知，又知地旋之理無可復疑，乃斷『靈憲』地動儀，謂張平子已明天靜。此雖皆善傳會，而無如天下之目不可掩也。」（救亡決論『嚴復集』）
- 13 「如星氣始於史區，勾股始於隸首。渾天昉於璣衡，機器創於班墨，方諸陽燧，格物所宗，鍊金腐水，化學所自，重學則以均髮均懸為濫觴，光学則以臨鏡成影為嚆矢，蛻水蛻氣，氣學出於亢倉，擊石生光，電學原於關尹。」（救亡決論『嚴復集』）
- 14 「自『大學』亡「格致」一篇，『周禮』闕「冬官」一册，古人名物象數之學，流徙而入於泰西，其工藝之精，遂遠非中國所及。蓋我務其本，彼逐其末，我晰其精，彼得其粗。我窮事物之理，彼研萬物之質。秦漢以還，中原板蕩，文物無存，學人莫窺制作之原，循空文而空談性理。於是我墮於虛，彼徵諸實。不知虛中有實，實者道也。實中有虛，虛者器也。合之則本末兼賅，分之乃放卷無具」（『盛世危言』道器）